

パヴィリオンとルートによる外部環境の類型

アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの「パヴィリオンとルート」作品における外部環境のデザイン (2)

正会員 ○ 福田 充弘**
同 安森 亮雄*

スミッソン パヴィリオンとルート ヴォイド
建築作品 外部環境

1. 序

前編で明らかにしたパヴィリオンの組合せをもとにその配列とルートの形状・種類を併せて検討することで外部環境の類型を導く。さらにそれらを比較検討することで構造的な特徴を考察し、アリソン・アンド・ピーター・スミッソンによる外部環境のデザインの一端を明らかにする。

2. パヴィリオンとルートによる外部環境の類型

前編のパヴィリオンの組合せをもとに、その配列とルートを併せて検討した結果、同様の傾向をもつ5つの類型が得られた(図)。

類型①、②、③は設計した要素とともに既存要素を含むものである。そのうち①は建物や部屋で既存樹木を囲み、それらが屋根付廊下などの線状の歩行者動線で連結された外部環境である。例えばルーカス本社ビル(No. 14)では、歩行者ブリッジで連結されたひだ状の平面形態の建物が既存樹木を囲んでいる。この類型に属する作品は平面と高さが一樣な建物や部屋の組合せであり、設計した要素の形態を揃え、既存の自然要素を際立たせていると考えられる。

②は既存の建物や塀を含みながら面的な歩行者動線を囲む外部環境である。分析例のエコノミスト・ビル(No. 4)はこの類型に該当する。この作品は大通りに面した1棟の建物を既存の建物と同じ低層で揃え、その背後に2棟の高層建物を配置することで街並を連続させ、また建物によって囲まれた広場を地下駐車場と分離された基壇状とすることで周囲から独立した広場を形成している。またベルリン・メーリング広場計画(No. 11)では、広場を囲む建物のピロティ下を掘り込み、街路を引き込むことで地上面の歩行者の広場を確保している。

③は既存の建物を中心に比較的小規模なパヴィリオンが一体化され、その周囲に外部環境が形成されるものである。例えばパース大学(No. 16)では、既存の校舎に5棟の建物を付加して一体化させ、その周囲に外部環境を形成している。この類型に該当する他の3作品はいずれも住宅であり、既存の住宅を中心に小規模な部屋を増築し建築周囲にひだ状の外部環境を形成するものである。

④は、既存樹木を取り込む①に対して、植栽や盛土といった自然要素を自ら設計しているものである。これらの建物や自然の一方の要素を中心に他方の要素が囲み、それらによって歩車分離される同心円状の外部環境を形成している。ロビンフッド・ガーデンの集合住宅(No. 13)はこの類型に該当する。この作品では2棟の建物によって囲まれた中央に緩やかなマウンド状の盛土を形成している。

この盛土は敷地にあった構築物を解体した建設廃棄物の山を緑化して作られたものであり、その周囲に歩行者デッキを張り巡らせた建物が囲むことで周囲と独立した環境を形成している。チャーチル大学(No. 7)では、ロビンフッド・ガーデンの集合住宅とは反対に建物を中心に生け垣状の樹木が取り囲むことで外部環境を形成している。

以上の類型①~④は既存や自然の要素をパヴィリオンとして取り込む構成であるのに対して、⑤は設計した建物のみを並列させ歩車分離するものである。この類型に該当するスタイルショープ地区計画(No. 9)では、低層の庭付き連結住宅、中層のテラス付き住宅、高層のメゾネット住宅が並列されたゾーンが形成されている。この類型に該当する大学や図書館の作品も同様に、設計した建物を並

表 パヴィリオンの配列とルートおよび外部環境の類型

No	作品名	設計年 [竣工年]	パヴィリオン の組合せ 前編(表4)	パヴィリオン 配列		ルート		類型
				前編(表5) 囲み 並列	一体化 (表6)	ルートの 形状 前編(表6)	ルートの種類 前編(表7)	
14	Lucas Headquarters	1973	ア(14) 設計人工要素 建物 or 部屋 + 既存要素 建物 or 樹木 既存建物 既存樹木	II		線	境 歩(UP)/車(DN)	① (3)
1	Wokingham Infants School	1958		II		線	境 歩(F)	
3	Wayland Young Pavilion	1959 [1959]		II		線	境 歩(F)	
4	The Economist Building	1959 [1964]		I		面	歩(UP)/車(DN)	② (3)
11	Berlin Mehringplatz	1962		I		面	線 境 歩(UP)/車(DN)	
5	Folly...A 'Solar' Pavilion	1959 [1959]		I		面	歩(F)	
16	University of Bath Buildings	1978 [1981]				—	歩(F)	③ (4)
19	Hexenbesenraum Bridge Hexenhaus	1990 [2001]				—	線 歩(UP)	
8	Priory Walk	1961 [1971]				—	歩(F)	
6	Losey House	1959 [1960]				—	歩(F)	④ (3)
10	Ansty Plum	1962 [1992]			並列	線 歩(UP)/車(F)		
17	Colleges' Path and Gate	1978			並列	線 歩(UP)/車(F) (DN)		
12	Occupational Health Clinic	1962 [1964]			II	歩(F)/車(F)		
20	Acropolis Place	1990			II	歩(UP)/車(F)	⑤ (6)	
7	Churchill College	1959	イ(3) 設計建物 設計自然要素	ii 並列	—	境		歩(F)/車(UP)
13	Robin Hood Gardens	1966 [1972]		ii		境		歩(UP)/車(F)
18	Bibliotheca Alexandrina	1988		ii 並列	—	境	歩(F)/車(F)	
9-1	Steilshoop, Teraced Houses	1961	ウ(6) 設計建物	並列		境	歩(UP)/車(F)	⑤ (6)
9-2	Steilshoop, Close Houses	1961		並列		境	線 歩(F)/車(F)	
9-3	Steilshoop, Teraced Crescent Housing	1961		並列			歩(F)/車(F)	
9-4	Steilshoop, U-Bahnhof	1961		並列			歩(F)/車(F)	
2	Langside College Of Further Education	1958		i 並列	—	面	境 歩(UP)/車(DN)	
15	Pahlavi National Library	1977			並列	—	線 歩(UP)/車(DN)	

表註) 表中の記号は前編表5-7に準ずる。()内の数字はパヴィリオンの組合せ
タイプの欄では該当する作品数を示す。

列させゾーニングすることが特徴となっている。

3. 外部環境の構成的特徴

前章で得られた類型の関係を類型に該当しなかった資料を含めて検討し、アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの「パヴィリオンとルート」作品における外部環境のデザインの特徴を考察する。

まず類型に該当しなかった4資料は、いずれも設計した要素とともに既存要素を含む組合せ（ア）であり、大学と街を繋ぐルート上に道標を点在させるもの（No. 17）や遺跡を塀で囲み広場を作るもの（No. 20）など、建物以外の構築物を設計している作品がみられた。このことは、建物だけでなくランドスケープや構築物も含めて設計したアリソン・アンド・ピーター・スミッソンの設計対象の広がりを示している。

次に5つの類型のうち①、②、④は、いずれも設計した建物とともに既存や自然の要素を取り込みながら囲み空間を形成し、歩行者動線で接続していることから、＜既存建物や自然要素を取り込んで囲まれた歩行者の外部環境＞という共通の傾向を見出すことが出来る。このことからアリソン・アンド・ピーター・スミッ

ソンは、建物を既存や自然の要素を含めた集合の一要素として捉え、それらに囲まれた歩行者のための環境を周囲の都市空間から分離することをデザインの主調としていたと考えられる。

4. 結

アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの「パヴィリオンとルート」作品を対象として、パヴィリオンの組合せと配列およびルートの動線から外部環境のデザインを検討した。その結果、既存の建物を中心として一体化されたパヴィリオン（③）や、設計した建物の並列による歩車分離（⑤）がみられた一方で、複数の類型（①、②、④）に共通する傾向として、既存の建物や自然の要素を取り込んで囲まれた歩行者のための外部環境がみられた。このことから、アリソン・アンド・ピーター・スミッソンは設計した建物を既存や自然の要素を含めた集合の一要素として捉え、それらに囲まれた歩行者の環境を周囲の都市空間から分離することをデザインの主調としていたと言え、建築と都市空間の関係を要素の水準で連続的に扱いつつ、それらの配列や動線という統合の水準で独立した外部環境を形成するというデザインの特徴が明らかとなった。

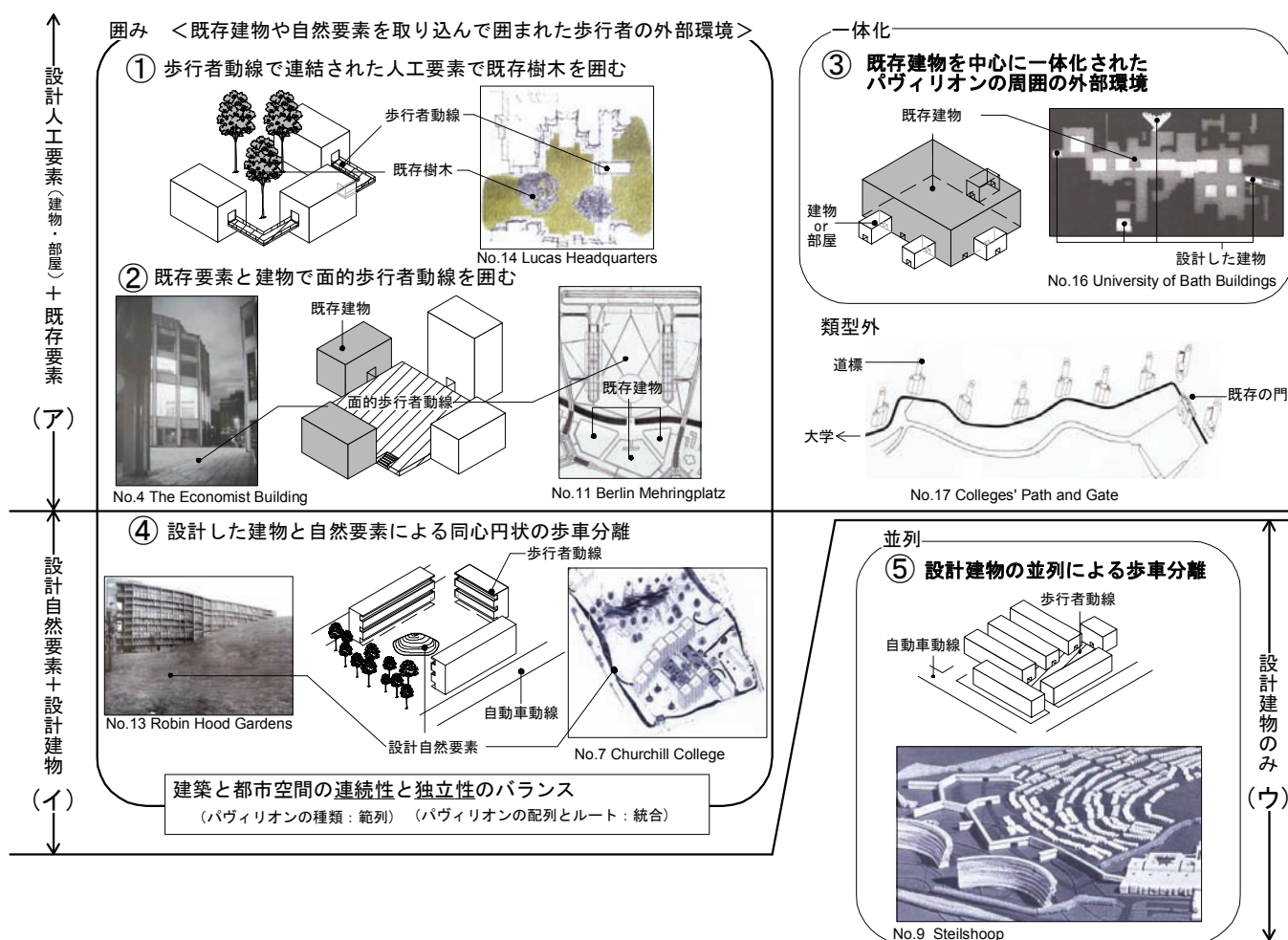


図 パヴィリオンとルート作品における外部環境のデザイン

* 宇都宮大学大学院工学研究科 准教授 博士 (工学)
**宇都宮大学大学院工学研究科 大学院生

* Assoc. Prof., Dr. Eng., Graduate School of Eng, Utsunomiya University
**Graduate Student, Graduate School of Eng, Utsunomiya University